

アンドレ・フェリビアン著「ファイリツプ・ド・シャンパーニュ伝」  
……一六二〇—四〇年代における宗教画制作を視点に考える

木村 三郎

# アンドレ・フェリビアン著「フィリップ・ド・シャンパーニュ伝」

……一六二〇—四〇年代における宗教画制作を視点に考える

木村 三郎

## 要 旨

Saburo KIMURA, 《La Vie de Philippe de Champaigne par André Félibien》 (Research in Arts/College of Art, Nihon University, 2010, no.51). L'auteur a traduit en japonais. La Vie de Philippe de Champaigne par André Félibien publiée en 1688 dans ses *Entretiens* et aussi y a ajouté les notes, les planches(fig.1-14) et la bibliographie concernat les peintures religieuse de cet artiste en principe entre 1620-1640.

Key Word : Philippe de Champaigne, André Félibien, *Entretiens*, Nicolas Poussin, peinture religieuse au XVIIe siècle.

## I 先行研究と問題の所在

フランス十七世紀の画家、フィリップ・ド・シャンパーニュ(一六〇二—一六七四)の生涯についての関係資料と先行研究としては、下記の参考文献が示しているように、画家が王立絵画彫刻アカデミーの創設時からの中樞メンバーであったこともあり、多くのものが知られている。本稿では、フランスの古文書館に残されている資料の調査には手がつけられなかった。しかし、若干の生前資料も含め、それなりの資料を確認することができた。

十七—十九世紀における資料は、①ソヴァールの『パリの文化財の歴史とその研究』から始まる。この町の美術作品名品案内の記録(SAUVBAL FLORENT LE COMTE, STEIN 等)②画家伝(FÉLIBIEN, GUILLET DE SAINT GEORGES 等)③事典の関連項目(MARRETTÉJAL 等)には分類が可能である。

二十世紀も三十年代以降、ようやく④学術性の高い研究が誕生する。特にステルランの薫陶を得たと想定される、B・ドリヴァルが、戦後、研究を開始し、没年近くまで、精力的な仕事を残している。その内容は、基礎的な先行研究を網羅し、他方、パリの国立古文書館などに収蔵された文書を精査したものである。一九七六年に

刊行が実現したカタログ・レゾネ(一九九二年に、補遺の巻)がその集大成である。そこに記述された詳細な資料集が現在の研究の主要な拠り所となっている。筆者には、その時期である一九七五—七六年にかけて同教授のゼミに参加していたこともあり、思いの深い研究書である。一方で、近年は宗教画も対象とした展覧会が数多く行われ、そのカタログの中に水準の高い研究が登場している。

本稿では、最も基本となる、フェリビアンが書いたシャンパーニュ伝の邦訳を試みた。一方で、この画家に関する先行研究の書誌について、基礎的な情報の整理と解題を試みた。しかし、現状の筆者の力量では、網羅的な調査は不可能であり、また研究の目的もそこにはない。シャンパーニュの生涯と、特に一六二〇—四〇年代に制作された宗教画の概要を紹介し、図版を挿図として入れ、関連のデータを記述した。なお、資料面を考え、人名の原綴はフェリビアンの使った表記のまま記入した。フェリビアンの生涯(一六一九—九五)を踏まえ、一六六七年に、アカデミーの席で、彼がシャンパーニュと議論を交わしている事実①を考えると、両者に実際があったことは無論である。画家の死後十四年後の、一六八八年、アカデミーの修史官であったフェリビアンは、『フィリップ・ド・シャンパーニュ伝』(図一)を出版した。パリのサン・ジャック街にあった老舗の出版業者、セバステイアン・マ

ルブルックラモワジー刊行の『古今の最も著名な画家の生涯と作品についての対話』の中の、第五巻に収録されている。本稿では、邦訳者の判断で、分かりやすさを尊重するために見出しを付けた。

## Ⅱ アンドレ・フェリビアン著「フィリップ・ド・シャンパーニユ伝」の邦訳

### ①誕生からブリュッセルでの修業時代 一六〇二〜一六二二年

フィリップは、賢明で美徳を備え、他の画家と比べても、尊敬に足る人物であった。彼は、ブリュッセルの町で、一六〇二年五月二六日に誕生した。両親は、とりたてて豊かというわけではなかったが（以上一六一頁）、善良な人間たちであった。フィリップは、小さい頃から絵画に関心を持ち、父親が文字を学ばせるために学校にやっただにもかかわらず、何かの形を素描することに夢中になる子供であった。今は、国王のもとにある、十二ヶ月の様子を扱ったタピスリーの下絵を描いたベルナール・ヴァン・オルレー Bernard Van Orlay という画家については、すでに話をした。彼には、フィリップと血縁のある娘がいた。彼が、しばしばその娘に会いに行くので、娘は父親の作品を見せた。こうして、フィリップはいよいよ絵画についての関心を高めることとなった。八歳から九歳の頃には、時間さえあれば、版画であれ、絵画であれ目にしたものごとくを模写していた。十二歳の時、父親は、息子が成功することが難しい職業につくことを嫌っていた。しかし、息子のそうした情熱を見るにつけ抵抗できずに、ブリュッセルの画家であった、ジャン・ブイヨン Jean Bouillon のもとに送るようになった。彼ののもとで、四年間修業を積む。その後、ミシェル・ド・ブルド Michel de Bourdeaux と呼ばれた、小品を制作することで評判の高かった人物のもとに入門する。そこで、フィリップは（以上一六二頁）、モデルを使った制作を始め、また、自然を写生し風景画を描いた。それは、この当時最もよく知られていて風景画家の一人であったフキエール Fouquierie<sup>(2)</sup> が、ド・ブルドのもとに足繁く通っていたこともあり、この青年の才能に気づいていたブルドはフキエールに会わせた。幸い、フキエールは素描をフィリップに貸し与えた。フィリップもこの機会を逃さなかった。フキエールは、風景の素描では、最も巧みな画家だったからである。実際、絵画に比べ、ずっと評価の高い素描が無数あったのである。

フィリップの表現技術が、さらに進んだ頃、父親は、彼を、エノー地方の町モンズにいたある画家のもとに送った。そこには、およそ一年いたのだが、彼はあまり優れた画家ではなかった。ブリュッセルに戻り、そこで一年たつぷりとフキエールのもとで学び直し、しっかりと親方の様子を吸収した。その成果もあり、フキエールは、シャンパーニユに機会を与えて描かせ、最後に自分で手を入れて、自分の作だとして、送り出すこともしばしばであった。

年末に、父親は、アントウエルペンの、ルーベンスの下で学ばせることを望み、他の青年たちがしているのと同じように（以上、一六三頁）、いい値段になる月謝を支払うことを考えた。しかし、フィリップは、同じ経費がかかるならば、イタリアに行かせてくれるように頼んだ。一六二二年、十九歳になっていた彼は、ブリュッセルを出発し、しばらく滞在するために、パリに赴く。

### ②パリで制作を始める時代 一六二二年〜

滞在の初期は、ある絵画の親方のもとに住み、一人ではできなかったモデルから描く肖像画を制作した。この仕事が終わった後、この当時著名であったロレーヌ出身の画家、ラルマン Alleman<sup>(3)</sup> のもとで学ぶ。この画家は、美術についての研究を深めるといふよりも、自分の経験で描くという画家であった。そのため、フィリップは遠からず、この画家から離れてしまうこととなる。彼が、遠近法を忠実に守り、素描に際し、実物からの描写にこだわったことに、ラルマンが反感を抱いたことが理由であった。

そうした方法に飽きたらず、自分の手法で肖像を描くことにこだわり、マンフェル取締官 General Mansfeld の肖像を制作した。この時期は、コレージュ・ド・ラオンを住居としていた。そこには、イタリアに初めて赴いて、帰って来ていたブッサン Le Poussin もいた（以上一六四頁）。交際が始まったのはこの時からである。ブッサンが、シャンパーニユが<sup>(4)</sup> 描いた絵画を所望したこともあり、彼のために風景画を描いた。

当時、画家デュシェヌ Duchesne<sup>(5)</sup> が、王妃マリード・メディシス Marie de Medicis のために、リュクサンブール宮で制作していた作品群を統括していた。彼は、ブッサンに、部屋の中にある板張りにいくつかの小品を描かせた<sup>(6)</sup>。シャンパーニユも、同じ宮殿で制作する機会を得た。デュシェヌは、それほど才知にめぐまれた人物ではなく、腕もよくはなかった。そのために、知性と技術のある人物を探し

ていたこともあり、王妃の部屋の数点の絵画をシャンパーニュに描かせることとなった。サン・タンプロワーズ司祭のモジ氏 Le sieur Maus は、王妃の建築担当官でもあったが、シャンパーニュのこの仕事に満足した。彼が描いた装飾部分は、以前に描かれていたものすべてと比べ、よりふさわしかった。しかし、シャンパーニュがこうした賞賛を得たことに、デュシエヌは、逆に不満であった。シャンパーニュは、彼の嫉妬を感じ取った。恐怖を覚え（以上、一六五頁）、仕事をやめることを考えた。そうした事情もあり、兄が、ブリュッセルに戻ることを薦めた。パリには長くは止まらず、ドイツ経由で、イタリヤに行くという話で、シャンパーニュはこの切迫した提案を承諾した。一六二七年、パリを離れる。しかし、ブリュッセルに帰国直後、サン・タンプロワーズ大修道院長から、王妃の首席画家であったデュシエヌの死亡が伝わる。そして、大至急、デュシエヌのいた立場を引き継ぎ、王妃の絵画制作の全ての指揮を取るようになり、求められた。一六二八年一月十日、シャンパーニュはパリに戻る。制作をすぐに再開。この時、彼が示した心遣いと熱心さは、王妃の信頼を得ることとなった。リュクサンブール宮に居住。千二百リール①の報酬を得る。王妃の意向で、サン・ジャック通りのカルメル会聖堂②や、リシユリユーの村落にある、ボワール・ヴィコントのリシユリユー枢機卿の城館のためにも制作した。

### ③成熟期 一六二八年末～四八年

一六二八年の末に、デュシエヌの長女と結婚。この時期に（以上、一六六頁）、カルメル会のための制作は継続しており、聖母と聖ヨハネのいる《キリストの磔刑》を描いた。短縮法を用いた人物像は、この場所で描かれた彼の作品の中で最良のものである。一方で、単彩画や他の装飾部分は、それほど技術の良くない画家に描かせたが、多すぎる制作依頼をこなすためには、他に方法がなかったからである。聖堂に入って右手にある大構図の作品は、いくつかの時期にそれぞれ完成した。《キリストの誕生》は、一六二八年に始め、翌年に完成した。《三王礼拝》はしばらく後に制作した。他の作品はその後であった。《三王礼拝》と《聖母のお潔め》は、彼自身の作品である。一方で、自らの指揮下で他の画家たちに描かせたものもある③。

一六三二年と三三年には、シャボン街のカルメル会聖堂④と（以上、一六七頁）、リュクサンブール宮殿近くの、カルヴァリオ修道女会のために数点制作。一六三三年に執り行われた聖霊騎士会の祭礼を、翌年に国王から依頼されて描く。そこには、

ド・ロングヴィル氏が国王が勲章を授与するところが描かれている。この作品は、グラン・ゾーギュスタン修道院⑤の、内陣横の礼拝堂にある。また、同じ絵の中に、宮廷の高官であり、同騎士会の官職にあり、財務官でもある、ド・プリオン de Pailon、ブティエ M. Boutilier 両氏を描いている⑥。

同年、現在、ノートルダム大聖堂の聖母の祭壇のまゝに掛けられている作品、「聖母子に跪く国王」を描く。国王が戦線布告をしたあとで制作を指示したものである。聖母が、イエスの横たわる十字架の下に描かれている。国王は跪き王室の衣装を身につけ、手には王冠を持ち聖母に捧げ、王国の全てが聖母の庇護のもとにあることを示している⑦。

一六三六年、デロシュ氏 Le sieur Desroches（パリ教会聖歌隊）の依頼で、ノートルダム大聖堂の内陣を飾るタピストリーの素描に使用するための作品を描き（以上、一六八頁）、その主題は、《聖母の誕生》（図9）と《聖母の神殿奉獻》であった⑧。

引き続き、枢機卿宮の小ギヤラリーのために制作するが、過重な制作に苦しむ制作依頼には極めて急がされるものが多く、描かなければならないことを調べる時間すらなかった。十分に技術のある画家が少なく、未熟な人間たちを雇わざるを得なかった。その上、シャンパーニュは、リシユリユーの町に数度の旅行を余儀なくされていた。枢機卿が、自分の住む城館での制作のために、シャンパーニュがその城に居住することを望んでいたからである。大邸宅の装飾を全うするには、リシユリユーの家族とともに生活し、常に素描し続けるしか方法がないという状況であった。枢機卿はその絶大な影響力で出来る限りの好意を示そうとし、ド・シャヴィニー氏 Made Chauvigny すらも動かして、シャンパーニュを説得することを試みた。しかし、シャンパーニュは決心することはできなかった。大きな財産を残すことに全く興味はなく、パリから離れることを考えなかった（以上、一六九頁）。リシユリユーのようなところに滞在することに関心はなかったからである。ただそこには、結婚後十年ともに暮らした妻が逝去するという事情もあった（一六三八年）。息子一人、娘二人が残された。彼らとともに暮らした日々は非の打ち所がないものであったし、子供たちへの愛情故に、その後、シャンパーニュは再婚することはなかった。神が与えた子供たちを育てあげることこそ、彼の選んだことであった。シャンパーニュは、こうした事情を、リシユリユーの町に赴かない理由に挙げた。にもかかわらず、枢機卿は、シャンパーニュが拒否をし、申し出に抵抗をしめたことに怒りを覚え、その理由が、ルイ十三世の母后の側についていたからだとなら

言うのであった。シャンパーニュが、マリー・ド・メデイシスに対し、義理があつたことは事実である。そして、それは、義理だけではなく、深い愛と敬意を持つていたからでもある。マリー・ド・メデイシスの側の人間たちが、彼女を不遇の身とさせた原因となった人物に、全てを尽くすことはできなかったのである。<sup>14)</sup>(以上、一七〇頁)。

リシュリユーは、シャンパーニュが、必ずしも、自分に敬意を払わないことに、怒りを感じていた。しかし、シャンパーニュ自身は、以前と変わらぬ態度を枢機卿に示した。敬意を表すことを忘れなかったからである。枢機卿は、侍従長のデブルネ Desbournais から、財産を殖やしたければ、一言言えば十分だ、とさえ伝えさせた。しかしながら、シャンパーニュは、自分は、より優れた画家にしていただけのことだけを望むものであると答えた。実際には、枢機卿にそうしたことができるわけもなく、その好意を得るといふ名譽を得ただけだったのである。

枢機卿へのこうした対応の仕方は、報告せざるを得ないことである。シャンパーニュにそれでも敬意を抱いていた枢機卿は、彼以外に、これほど無欲な人間を見いだせなかったからである。リシュリユーが、パリの枢機卿宮大ギャラリーを描くことを命令し(以上、一七一頁)、シャンパーニュが「著名人」の絵画連作の最初の作品を描いていた時、当時、名を知られていたヴェーエ Vœuet が、誰かのついで、その半分を描く権利を得てしまった。それは、リシュリユーが認知する以前の話で、シャンパーニュもそれを阻止できなかった。こうした理由で、このギャラリーにある作品の全てが、シャンパーニュの作品だというわけではないのである。ヴェーエは、時の財務官ド・デフィア氏 M<sup>re</sup> de Deffia を頼って、ギャラリーの礼拝堂を描き、また、枢機卿の肖像を描くことにもなった。しかし、それはできの良い作品ではなく、リシュリユーは満足しなかった。その後、リシュリユーが望んで、シャンパーニュが等身大の肖像を描いた時、枢機卿は、ヴェーエの描いた肖像画について意見を求めたことがある。シャンパーニュが紳士的な答えをすると、枢機卿は直ぐに「あなたは、これ以上ヴェーエのことを気にかけることはない。」と答えた。<sup>15)</sup>(以上、一七二頁)。

一六四〇年、シャンパーニュは、リシュリユーの肖像を再び制作した。完璧と言つて良いほど美しかった。枢機卿の肖像としては最後の作品となった。これ以上の出来で、しかもよく似ているものを描くことは不可能だと確信した。枢機卿は、以前に描いた肖像を、この作品を手本に修正することを命じた。

一六四一年、国王、王妃、皇太子の肖像を描く。リシュリユーから、ソルボンヌの聖堂のドームを描くように依頼される。一六四二年、リシュリユー枢機卿が逝去。

シャンパーニュはドームの壁面の制作中であつた。このために、完成は、一六四四年となった。<sup>16)</sup>しかし、そのおかげで、忙殺されていた大工事に近い作品制作の仕事から解放されることもなった。

しかし、この画家を、一人息子が頭部に損傷を得て、命を失うという悲劇が襲う。その深い悲しみを紛すために、兄に、その息子の一人であるジャン・バティスト Jean Baptiste を送ってくれるように頼む(以上、一七三頁)。幸いそれは容易に実現し、彼は、国王ルイ十三世が逝去し、皇太子が即位した日にパリにやってきた(一六四三年)。

シャンパーニュは、この当時まだ、リュクサンブール宮に居住していた。そこには、オルレアン公 Le Duc d'Orleans も居住していたが、公爵夫人がパリに移つて来たために、シャンパーニュは転居し、ノートル・ダム島に所有していた邸宅に移つた。ここでは、サントノレ街にあるオラトリオ修道会聖堂<sup>17)</sup>のテュブフ氏の礼拝堂のための絵画を制作。一方で、国王、摂政の母后<sup>18)</sup>の肖像も数点描いた。母后は、シャンパーニュに、ヴァルド・グラス修道院にある居室に、「聖ベネディタスの生涯」からいくつかの主題<sup>19)</sup>を描くように依頼された。母后は、この修道院を訪れる度に、シャンパーニュが制作しているところを眺め、喜んだ。

#### ④王立絵画彫刻アカデミーの時代 一六四八年

この時期に、絵画彫刻アカデミーが創設された。シャンパーニュは参加を求められ、その必要性を高く評価し参加することとした。国王の庇護とその寛容さのもとにこの組織は成立し、シャンパーニュも(以上、一七四頁)、主幹の一人に選出された。<sup>20)</sup>彼はこうした立場にあつても、かつて例がない程自己の利益を顧みず、それを必要としている人々に分かち与え施すことだけを考えた。この組織のために、守護聖人である、《聖ピリポ》を描いた絵画(図13)を制作した。

一六四七年、モンターニュの丘にあるサン・マルソー通りに移る。空気が澄み、休息のよい場所を選んだ。肖像画制作から離れ、長く描いて来なかったが、より関心のあるジャンルの作品を制作した。

一六四八年、《マグダラのマリア》(図10)、《モーセ》(図11)、そして、パリのポール・ロワヤルにある《最後の晩餐》(図12)を描いた。時には、風景画を描くことで気散じをした。

パリで争乱<sup>21)</sup>が起こると、市内に戻らざるを得なかった。プティ・サン・タン

トワヌ街にある邸宅に住んだ。

一六五四年、ブリュッセルの兄に会うために旅行(以上、一七五頁)。絵画を大変愛好していたレオポルド大公が、シャンパーニュの到着を知って、「アベルの死を嘆くアダムとイブ」(図14)を描く等身大の作品を依頼した。作品は、翌年完成する。大公は、その喜びを示すために、シャンパーニュの甥の一人を、フランドルの領地の監督官に就けた。

この作品を仕上げた後、タピスリーの下絵となるサン・ジェルヴェ(ゲルヴァシス)聖堂に現在三点ある作品の一つの制作を開始した<sup>(22)</sup>。

一六五七年、シャンパーニュのもとで、長く制作していた甥が、ローマに赴くことを希望した。しかし彼は、簡単にはその願いを認めず、十八ヶ月だけの旅を許した。可愛がっていた甥が長期にわたり不在になることを恐れたからである。彼の帰国後は、国王がスペインと講和するに際し、ヴァンセンヌ城の居室のために甥とともに制作した。至急の仕事で、拙速とすら言えた(以上、一七六頁)。国王が居室の完成前に宿泊することになった。いつもと異なり、常に求められていた完璧さが達成できなかった部分もあった。

シャンパーニュは、自ら、国王の大居室の天井を描いた。国王がジュピターの姿で表され、フランスという国家に命じて平和を希求させるという寓意を表していた。

### ⑤晩年

一六六六年、テュイルリー宮の皇太子の間に、甥と共同で制作する命令を受ける。自分では、「アキレスの教育」だけを描き、残る部分は甥に任せた。残された時間を静かに送ることを望んだ。常に描き続け、自分の唯一の趣味を楽しむことができなかつた人生だったからである。

シャンパーニュには、ポール・ロワヤルの修道女になっていた長女がとりわけ慰めであった。妻の死後、ロード司教であったド・ペレフィクス氏 M.de Perfixe の薦めで、二人の娘をそこに入れていた(以上、一七七頁)。彼は、リシユリウの生前から友人であった。妹は寄宿生の時に死亡した。長女は、望んで修道女になった。シャンパーニュに残された子供は一人だけであった。寂しさを紛らわすためにも、その娘を愛惜した。

この名声を博した画家シャンパーニュも七二歳になり、日々、衰えを隠せず、やがて訪れる死を予期していた。一六七四年八月八日、病に倒れ、同じ月の十二日に

息を引き取った。

シャンパーニュは、柔和で、謹厳で実直な人柄であった。姿は美形といって良く、背は高く、少しばかり太り気味であった。生活も折り目正しいものであった。逝去するわずか前に、シャンパーニュは大振りの自画像を残した。ブリュッセルの町の風景も描き込んだ肖像であった。彼の作品の中で、最も美しい肖像画の一つである私は、この優れた画家の人生を論じるに際し、視野を少し広くとりすぎたかも知れない。しかし、この画家を評価する際に、イタリアの巨匠たちと比較することは意味がないであろう(以上、一七八頁)。彼らとは、美について異なった思想を抱いていたからである。シャンパーニュは、生まれた国の美のあり方を研究し、完成の域に高めた画家だった。世俗的な主題を好まず、可能な限り、裸体表現を避けた。シャンパーニュは、フランスが今と比べ文化が成熟せず、優れた画家が少なかった時代に、絵画表現における最高の位置にいた存在であった(以上、一七九頁)。

### 省略記号

AB: *The Art Bulletin*

BLANC: *Histoire: BLANCC*, *Histoire des peintres de toutes les écoles*, 1853-75, J. Renouard etc., 14 vol.

BLUCHE: *BLUCHE(F)*, sous la direction de), *Dictionnaire du Grand Siècle*, 1996, Fayard.

BRICE: 1752. BRICE(G), *DESCRIPTION//DE LA VILLE//DE PARIS//ET//DE TOUT CE QU'ELLE CONTIENT//de plus remarquable*, (1684) 1752, Paris, Chez les Librairies Associées, 4 vol., 9e éd., 復刻版 1971, Droz, Minard, CODET (P), FLEURY (M).

BSHAF: *Bulletin de la Société de l'Histoire de l'Art français*

DA: *Dictionary of Art Grove*, ed. TURNER (J), 34 vol. 1996.

DEZAILLIER D'ARGENVILLE, *ABREGE*, 1762 :DEZAILLIER D'ARGENVILLE(A.-J.), *ABREGE//DE LA VIE//DES//PLUS FAMEUX PEINTRES* ; (1745-52)1762,Paris,De Bure,M.DCC.LXII,nouvelle édition,revue,corrigée & augmentée ,4 vol.; 複製版 .Minkoff.1972,4 vol.

DORIVAL,1976 : DORIVAL(B.), *Philippe de Champagne, 1602-1674 : la vie, l'oeuvre, et le catalogue raisonné de l'oeuvre*, L. Laget,1976,2 vol.et supplément,1992.

FELIBIEN, *ENTRETIENS*: FELIBIEN(A.), *ENTRETIENS SUR LES VIES ET SUR LES OUVRAGES DES PLUS EXCELLENS PEINTRES ANCIENS ET MODERNES*,1666-88,PARIS,S.Marbre-Cramoisy,etc.,5 vol.; 複製版 1972,Minkoff.3 vol.

FIERRO :FIERRO(A.),*Dictionnaire du Paris disparu*,1998, Parigramme

FLORENT LE COMTE ; FLORENT LE COMTE ,*CABINET //DES SINGULARITEZ//D'ARCHITECTURE, //PEINTURE,SCULPTURE, //ET GRAVEURE//* PARIS,1699-1700,3 vol.,N.Le Clero; 複製版 1972,Minkoff.

GBA :*Gazette des Beaux-Arts*,

GDEL : *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse*,Larousse, 1982 -1985,10 vol.

GUILLET DE SAINT-GEORGES :GUILLET DE SAINT-GEORGES, *Mémoires inédits sur la vie et les ouvrages des membres de l'Académie royale de peinture et de sculpture*,1854,J.B. Dumoulin,2 vol.

HILLAIRET :HILLAIRET(J.),*Dictionnaire historique des rues de Paris*,(1963-72)1985,Minuit.2 vol.

HOUBRAKEN:HOUBRAKEN(A.),*DE GROOTE SCHOUBURGH DER NERDERLANTSCHEN KONSTSCHILDERS EN SCHILDERESSEN*,1753,3 vol.'s Gravenhage,J.Swart,etc.; 複製版 B.M. Israël,1976.

JAL :JAL(A.),*Dictionnaire critique de biographie et d'histoire*,1867,H.Plon ; 複製版 Slatkine, 1970(1872).

KRAMM :KRAMM(C.),*De lewvens en werken der Hollandsche*,Amsterdam,G. Diederichs,7 vol.1857-1863 ; 複製版 B.M.Israël,1974,2 vol.

LAZARE:LAZARE(F. et L.),*Dictionnaire administratif et historique des rues de Paris et de ses monuments*,Paris,F. Lazare,(1844),1855; 複製版 Maisonneuve et Larousse,2003,

MARIETTE :CHENNEVIERES(Ph.de) et MONTAIGLON(A.de),*Abecedario de P.J.Mariette et autres notes inédits de cet amateur sur les arts et les artistes*, (Ca.1740-1770)1851-60 J.B.Dumoulin (脚注のある校訂版) ; 複製版 F.de Nobele, 1966,6 vol.

NAAF : *Nouvelles Archives de l'Art français*

PEROUSE DE MONTCLOS(J.-M.),*Le guide du patrimoine,Paris*,1994,Hachette.

RMN :Réunion des Musées Nationaux

SAUVAL :SAUVAL(H.),*HISTOIRE ET RECHERCHES DES ANTIQUITES DE LA VILLE DE PARIS*,(1655-1670)1724,Paris,C.Moette et J.Chardon,3 vol.; 複製版 ,Minkoff,1974,3 vol.

STEIN,1890 : STEIN(H.), 《Etat des objets d'art placés dans les monuments religieux et civils de Paris au début de la révolution française, publié d'après des documents inédits》, *NAAF*, p.1-131.

THEME und BECKER: THEME(U) und BECKER(F). *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler*, 1907-50, 30 vol. Seemann.

VILLOT: VILLOT(F), *Notice des tableaux/du Louvre*, 1858, 3 vol.

WURZBACH: VON WURZBACH(A), *Niederländisches Künstler-Lexikon*, 1906-11, Von Halm und Goldmann, 3 vol.; 復刻版 B.M. Israel, 1986, 2 vol.

### フィリップ・ド・シャンパーニュの宗教画についての主要参考文献

文献索引 1952 PARIS(DORIVAL), p.20-23 : 1976 DORIVAL, I, p.18-19 : 1996 SAINTE FARE GARNOT, DA, VI, p.436-437-2007 LILLE et GENEVE (SAINTE FARE GARNOT et TAPPE), p.304-317

作品目録 1857 VILLOT : 1934 PARIS(STERLING) : 1952 PARIS(DORIVAL) : 1970 DORIVAL : 1972 DORIVAL : 1976 DORIVAL : 1985 WRIGHT : 1986 COMPIN : 1989 INGAMIELLS : 1992 WRIGHT : 一九九四栗田

### A. 同時代資料記述の時代 (中び、参考図書から)

1655-1670 SAUVVAL, I, p.466-467(LA SORBONNE), II, p.166-168(LA GALLERIE DES HOMMES ILLUSTRÉS), etc. 『パリの文化財の歴史とその研究』と邦訳が可能な文献の中の関連箇所。

1668 FELIBIEN(A), *CONFERENCE DE L'ACADEMIE ROYALE DE PEINTURE ET DE SCULPTURE Pendant l'année 1667*, Paris, F. Leonard, p.17-27 : 復刻版 1973 Minkoff. 一六六七年六月四日(土曜日)に行われた王立絵画彫刻アカデミーにおいて行われた第二回の講演。シャンパーニュの講演をフェリビアンが記録し翌年に刊行したもの。ティツィアーノ作《キリストの埋蔵》(現・ルーヴル美術館蔵)についての分析。

(1684)1752 BRICE(G), I, p.150, 196, 231, 238, etc.

1688 FELIBIEN *ENTRETIENS*, V, p.161-179, 本翻訳の当該テキスト。

### B. 基礎資料作成の時代 (中び、参考図書から)

1700 FLORENT LE COMTE, III, p.108-116, 画家伝の中の一項目。

(c.1740-70)1851-53 MARIETTE, I, p.349-353, 美術事典のなかの一項目。ポール・ロワール修道院にあったと想定される死亡記録を紹介。

(1745-52)1762 DEZAILLIER D'ARGENVILLE, *ABREGÉ*, III, p.367-374, 画家伝の中の一項目。フェリビヤンの記述を踏襲しているが、若干の新しい情報が加わっている。シャンパーニュの肖像版画を挿入。

1753 HOUBRAKENI, p.223-227, トランタ美術事典のなかの項目。Florent le Comte が引用されている。肖像版画。

1754 DESCAMPS(J.-B.), *LA VIE//DES//PEINTRES//FLAMANDS//ALLEMANDS ET HOLLANDOIS//AVEC DES PORTRAITS*, II, Paris, C.-A. Jombert, p.62-68 : 復刻版 1972, Minkoff. トランセル、オランタン、ドメインの画家伝纏めたもの。若干新しい情報が入る。

1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, 《Philippe de Champagne》, I, p.239-258, 今日でもしばしば引用される、フェリビヤン以降、十九世紀では極めて重要な資料。

1857 KRAMM, I, p.228-230, トランドル系の画家に詳しい事典の中の一項目。この時代の調査としては、肖像画のモデルのデータなど、優れた成果が認められる。

1857 VILLOT(F), II, p.38-49, ルーヴル美術館絵画収蔵品目録。シャンパーニュについては、二二点の記録がある。その後のカタログ作成の基礎データの一つとなる。



1865 BLANC *Histoire*, p.1-16. フランス絵画史の中の記述。フェリピアンの記述内容を踏襲するが、基本資料に、ルーヴルや他の所蔵品データと、十八後半からの作品の販売目録を使用している。八点の主要作品の複製版画を挿入している。

(1867)1872 JAL, p.353-354. 人名辞典の中の項目。フィリップだけでなく、ジャン・バティスト等も含んだ、詳細なデータ。

1871 HERLUISSON(H.), *Actes d'état-civil d'artistes français, peintres, graveurs, architectes, etc.* H. Herluisson, p.68-69. 住民票研究等に基づく、人名事典の中の項目。死亡記録を記述。

1890 STEIN フランス革命の時点で散逸した宗教美術作品についての基礎的な資料。十九世紀末〜二十世紀初頭で、貴重な研究を残した研究者。

1891 STEIN(H.), *Philippe de Champagne et ses relations avec Port-Royal*. E. Pilon, Nourrit.

1906 WURZBACH I, p.270-272. オランダ美術家事典の中の項目。Houbbrakenを参照。絵画、関連版画等の作品リストが大変詳しい。絵画についても、フランス以外の収蔵組織の情報が豊かである。

1912 STEIN(H.) in THIEME und BECKER, VI, p.354-355. 著名な美術家事典の中の項目。フランソワ系資料について目配りが優れた記述。

### C. 作品分析を含んだ学術的な調査研究の時代

1934 PARIS: Expo *Les peintres de la réalité en France au XVIIIe siècle*. Musées Nationaux, cat. par STERLING(C.), p.23-28. シャンパーニュの作品について、四点のみであるが、フランス十七世紀研究で学術的な意味で画期的な意味を持った展覧会カタログ。近年、この展覧会カタログについて総括を行った展覧会が開催された。

1948 LEJEUX(J.), *La teinture de la Vie de la Vierge à la Cathédrale de Strasbourg*. GBA, décembre, p.405-418. 現在、ストラスブール大聖堂所蔵のタピストリーについての研究。

1952 PARIS: Expo *Philippe de Champagne*. Orangerie des Tuileries, cat. par DORIVAL(B.), Musée national. 後に、ノルボニス大学美術史担当教授となるメリヴァルの初期の研究。シャンパーニュには、作品カタログが少なく今日でも有用。

1952 HERARD-DUBREUIL(J.), *À propos d'un tableau exécuté par Philippe de Champagne d'après les dessins de Georges Lallement: <Le prévot et les Echevins de la ville de Paris implorant sainte Geneviève>*. BSHAF, p.14-22. 《聖女ジュヌヴィエーヴに懇願するパリ市政府主席ニコラ・マ・バインルと市政府の要人たち》を論じる。一六二五年制作とされ、この画家の知られている最も古い作品。

(1953)1999 BLUNT(A.), *Art and Architecture in France, 1500-1700*. Yale University Press. Coll. Yale University Press Pelican History of Art, 5th ed., revised by BERESFORD(R.), p.163-168. フランス十七世紀美術史を学際的な古典的な研究書。改訂版の註 (p.290-291) に新しい情報と文献問題が入る (一九八三年に改訂版 Macula)。

1960 DORIVAL(B.), *Poussin et Philippe de Champagne*. Nicolas Poussin, Actes, I, p.57-70. 一九五八年に行われたプッサン・ミンボジナムの際に発表された内容を刊行したもの。《最後の晩餐》を描くプッサンとシャンパーニュの作品の比較とその関連性を論じる。

1966 RAND Jr.(O.A.), *Philippe de Champagne: Studies in Style, Theory and Jansenist Influence*. Michigan University Microfilms. 博士論文

1968 COURCELLEJ. et P.), *Le "Tolle Lege" de Philippe de Champagne*. *Recherches Augustiniennes*, V, p.1-4. 《聖アヌスナイス》を論じる。

1972 DORIVAL(B), 《Recherches sur les sujets sacrés et allégoriques gravés au XVIIe et XVIIIe siècle d'après Philippe de Champaigne》, *GBA*, LXXX, p.5-60.  
一九七〇年(GBA)に複製版画となった肖像作品のカタロン・レンネを作成した著者が、宗教図像と寓意図像作品について同じく作成したカタロン・レンネ。著者が、精力的に研究を刊行する一九七〇年代の初めの研究。

1972 DORIVAL(B), 《Les oeuvres de Philippe de Champaigne sur le sujet de l'Annonciation》, *BSHAF*, Année 1970, p.45-71. 四京のシャンパーニュ作《受胎告知》の周辺の問題についての詳細な分析。

1973-a DORIVAL(B), 《L'Ex-Voto de 1662 par Philippe de Champaigne》, *La Revue du Louvre et des musées de France*, XXIII, p.337-348. ローヴル美術館所蔵《一六六二年の奉納画》についての研究。

1973-b DORIVAL(B), 《Richelieu, Philippe de Champaigne et la décoration de l'église de la Sorbonne》, *BSHAF*, Année 1972, p.95-103. 一六四一—一四四年制作の、ルボンヌ聖堂内部装飾についての研究。聖アンブロシウス、聖グレゴリウス、聖ヒエロニムス、聖アウグスティヌスの図像論を含む。

1975 SAINTÉ FARE GARNOT (N.), 《La décoration de la chapelle de l'Hôpital des Incurables (Hôpital Laennec, rue de Sévres)》, *BSHAF*, Année 1974, p.55-61. シャンパーニュについての言及はわずかなが、情報の質が高く好論文。後に、シャンパーニュ研究の中心となる著者の論考。

1976 DORIVAL, 現在のみ、最も浩瀚なカタログ・レンネ。シャンパーニュ研究における記念碑的な意味を持つ労作。先ず、この文献から調査を始めるべき著書。

1977 BLUNT(A), 《A New Book on Philippe de Champaigne》, *BM*, 119, No. 893, p. 574-579. ヴァリヴァルのカタログ・レンネについての書評。

1978 DORIVAL(B), 《La cène(1678) de Jean Baptiste de Champaigne》, *BSHAF*, Année 1976, p.99-110. シャンパーニュの甥の描いた《最後の晩餐》についての論文

でも、シャンパーニュ自身の作例の引用もある。

1979 HARRIS(A. S.), 《Bernard Dorival, Philippe de Champaigne, 1602-1674》, *AB*, Jun. p.319-322. 上記1976 DORIVALのカタロン・レンネについての書評。

1982 FELTON(C.), 《Philippe de Champaigne's "Saint Paul"》, *BM*, CXXIV, 956, p.693-694. 本論では、《聖パウル》についての研究。

1983 RAND JR.(O.A.), 《Philippe de Champaigne and the Ex-Voto of 1662: A Historical Perspective》, *AB*, March, LXV, 1, p.78-93. マーナ・ロブレイル閣僚の文書を使用し、一六六二年の奉納画について調査した、シャンパーニュの視点からの詳しい研究。

1985 DORIVAL(B), 《Richelieu et Philippe de Champaigne》, in PARIS:Expo.: *Richelieu et le monde desprit Sobonne*, Imprimerie nationale, p.129-134.

1985 WRIGHT(C.), *The French Painters of the Seventeenth Century*. Orbis, p. 153-158. DORIVAL, 1976に準じたデータ集でもあるが、作品全体を見渡すには重要な資料。

1986 COMPIN(I.) et ROQUEBERT(A.), *Catalogue sommaire illustré des peintures du musée du Louvre et du musée de l'Orsay*, Paris, III, p.118-121. ナーヴル美術館所蔵作品についての信頼性のある目録。

1989 ALDEN(M.) and BERRSFORD(R.), 《Two Altar-Pieces by Philippe de Champaigne: Their History and Technique》, *BM*, CXXXI, 1035, p.395-401. ロンケンのウァーリス・ロンタモン所蔵の《受胎告知》と《羊飼いの礼拝》が、修復後された後に書かれた精緻な研究報告。

1989 INGAMMELLS, 《Philippe de Champaigne》, *The Wallace Collection, Catalogue of Pictures*, III, p.91-113. 四京の収蔵作品についての目録でもあるが、

それぞれについての解説は論文である。

1990-91 PARIS: Expo. *VOUET*, Grand Palais, Musées nationaux, cat. par THULLIER(J); BREJONDE LAVERGNE(B); LAVALLE(D); ユーエ展のカタログであるが、シャンパーニュとの関係を理解するためには、有効な資料。

1992 DORIVAL(B), *Supplément au catalogue raisonné de l'oeuvre de Philippe de Champaigne*. Lagel, 1992. 上記' 1976 DORIVAL のカタログ・イベントのため補遺。

1992 WRIGHT(C), *The World's Master Paintings*. Routledge, p.232-234. 参考図書であるが、この時期における、作品の概要と制作年に関する通説を知るには参考になる。

1993 DORIVAL(B), 《Deux tableaux inédits de Philippe de Champaigne》, *BSHAF*, Année 1992, p.25-29. 上記の新発見の作品についての分析。

一九九四 栗田秀法「シャンパーニュ」『西洋絵画作品名辞典』三省堂、二九二―二九五頁。短い辞典項目であるが、シャンパーニュ研究としては、この時期における先端的な研究の成果が集約されている。

1995 PORT-ROYAL, Expo: *Philippe de Champaigne et Port-Royal*, Musée national des Granges de Port-Royal, p.98-99, no.17, cat. par LESNE(C). 《聖マウグステイヌ》をはじめ、ポール・ロワヤル修道院との関係が深い作品を集めて行われた展覧会カタログ。

一九九六 拙論「フィリップ・ド・シャンパーニュ作《ヒッポの聖アウグステイヌ》について」『美学美術史研究論集』第一四号、六一―六七頁、なお、二〇〇七「燃える心臓・・・シャンパーニュ」そして「ユーエ」『ニコラ・プッサンとトマス会 画像の研究』中央公論美術出版、二七六―二八五頁、に改訂し再録。

1996 SAINTE FARE GARNOT(N), 《Champaigne.de》, DA, VI, p.436-437

2000 ROME:Expo. *Le Dieu caché. Les peintres du Grand Siècle et la vision de Dieu*, Rome, Académie de France à Rome, cat. par BONFAIT(O.) et MACGREGOR (N.), etc. 神学論を軸にした展覧会カタログ。

二〇〇一 栗田秀法「原典資料紹介 王立絵画彫刻アカデミーの二六四八年の会規集」『愛知県美術館研究紀要』第七号、三二―五四頁。

2002 SAINTE FARE GARNOT (N), 《Philippe de Champaigne, peintre de Marie de Médicis》, *Le "siècle" de Marie de Médicis*, p.95-105, sous la dir. de FUMAROLI(M), actes du séminaire, Orso. 著者は「近年トランスレンドリヴァル」を中心とする活躍について研究者。

2003-2004 BLOIS:Expo. *Marie de Médicis, un gouvernement par les arts*, Château de Blois, Somogy, cat. par GALETTI(S), etc. BASSANI PACHT(P), SAINTE FARE GARNOT(N), etc. リトキアンブール宮殿の「シャンパーニュの作品」についての言及がある。

2003 CAEN:Expo. *Baroque, vision jésuite*, Musée des Beaux-Arts, cat. par LAVALLE(D), et FUMAROLI(M), etc. トマス会画像についての視野の広い展覧会カタログ。

2006 PARIS:Expo. *Orangerie, 1934 : les "peintres de la realite"*, cat. par GEORGEL(P), RMN.

2007 LILLE et GENEVE:Expo. *Philippe de Champaigne, 2007-2008*, cat. par SAINTE FARE GARNOT (N) et LAVALLE(D), etc. 近年行われた著作による展覧会カタログ。やや不正確な部分も残るが、参考文献表には、最新情報がある。

2007 SAINTE FARE GARNOT(N), 《Philippe de Champaigne》, *Le dossier de l'art*, no.140.

本稿の趣旨は、先ず、フェリビアンによるシャンパーニュ伝の紹介をすることにある。そこに、引用、または暗示されている十四点の宗教画の図版を挿入した。本稿が、目下準備している一六五〇年代前半にシャンパーニュが描いた、宗教画像作品の予備的な研究にすることを意図しているからである。従って、先行研究で、しばしば引用されている肖像画の挿図は入れていない。そうした作業には、より専門的な研究が必要であり、現在の筆者の力量を超えるものだからである。ここに引用した図版は、各作品に付けた参考文献からわかるように、ドリヴァルをはじめ、近年の主要な研究者たちが、フェリビアンが引用した作品であると判断したものに限定している。脚注の情報も基本的には同じ趣旨で抑制したものである。

また、シャンパーニュの宗教画が深く関係する、バリの宗教建築などについては、邦訳に際し、基本的には、SAUVAL, LAZAREHILLAIRET, PEROUSE DE MONTCLOS 等をその都度参照したが、個々の聖堂を特定する作業は難しく、示唆するに止めた。

1. FELBIEN, CONFERENCE, 1668, p.17-27.
2. フェリエールに「ステショウ(W.)」, 《Drawing and Etching by Jacques Fouquier》, GBA, 1948, p.421-434.
3. エルマンに「ラヴァル」, LAVALLE(D), in cat. 1992 NANCY: *ExpoLart en Lorraine au temps de Jacques Callot*, Musée des Beaux-Arts, RMN, p.194-209, 221, 270-275.
4. 原文では「ニコラス」, 画家名や Champagne の名を表記に変えている。
5. Dechesne(Nicolas)に「ニコラス」, NICOLAST) DA, 1996, p.363.
6. GALETTIS), 《L'appartement de Marie de Médicis au palais du Luxembourg》, in cat.2003 BLOIS, *Expo Marie de Médicis*, p.124-133. 近年の資料とあわせて、建築史上の基本的な情報が詳しい。
7. Carmelites, LAVALLE, 2007, p.95. 近年の研究によれば、このカルメル会聖堂に描かれた作品が、図2《キリストとカナンの女》、並びに、図3《キリストのエルサレム入城》であると思われる。
8. 近年の研究では、図5に示した《ラザロの復活》はこの頃の作品とされている。SAINTE FARE GARNOT, 2007, no.6. 図6《神殿奉獻》、この頃の頃に描かれたと思われる。カルメル会聖堂のための「聖母の生涯」を描いた連作の中の一つである。作品の左下に「ある」, 紋章は「Leon de Bouthillier のもの」, 王妃マリー・ド・メデシシスの建築物

管理官 intendant をこめていた人物である。フィリップ・ド・シャンパーニュの支持者の一人であった。SAINTE FARE GARNOT, 2007, no.4.

9. 関連資料として、LAZARE, p.246; FIERRO, p.155-156 (Silvestre の版画).
10. SAUVAL, p.447-448; HILLAIRET, p.597-598; FIERRO, p.42-43 (Silvestre の版画).
11. 近年の分析から、ルイ十三世の財務長官 Claude de Bullion が、図7に関係があることが指摘されている。SAINTE FARE GARNOT, 2007, no.12.
12. フェリビアンは、一六三三年制作としているが、近年の研究では、一六三八年頃とされる。フランス革命の時期までは、ノートルダム大聖堂にあった。
13. ストラスブール大聖堂の所蔵タピスリーの下絵画家はだれか(シャンパーニュとポエロン)を論じた。上記「LEJEANUX, 1948」の論考に詳しい。
14. ここで、若干、マリー・ド・メデシシスとリシュリューとの対立の事情を記しておきたい。成人し、母后マリーの摂政を嫌ったルイ十三世は、一六一七年四月、ルーヴル宮に、マリーの寵を得ていたコンチニを召喚して殺害させた。ルイ十三世の親政が開始されると同時に、母后との骨肉の争いが始まった。その後、王と母后との間を調停する上で認められたリシュリューが、宰相として権力をふるう。しかし、三十年戦争に際し、マリー派は、リシュリューと鋭く対立をした。マリー派は、リシュリューの罷免を要求したが、国王はリシュリューを支持した。マリー派の権力は失墜。翌年の一六三二年七月、王母は、ブリュッセルに亡命した。一六四二年、帰国の願も認められず、ケルンで死去 (GDEL, 1984, VIII, p.6664)。CONSTANT (J.M.), in BLUCHE, p.972-973. 参照。シャンパーニュとマリー・ド・メデシシスとの関係については、SAINTE FARE GARNOT, 2002.
15. SAUVAL, II, p.166-167; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.241; 1990-91 PARIS: *Expo VOUËT, THULLIER*, p.244-246.
16. DORIVAL, b.1973.
17. LAZARE, p.604; HILLAIRET, II, p.198-199; PEROUSE DE MONTCLOS, p.370-371.
18. アン・オートマンマン。Anne d'Autriche(1601-1666), GDEL, I, 1982, p.502.
19. 編年主義で記述されているフェリビアンに従えば、この連作は、一六四三年から、四八年の間に位置づけられる (DORIVAL, 1976, II, no.100-108, p.61-63; 一九九四 栗田二九三頁)。しかし、近年の研究では、一六五六年頃とされる。SAINTE FARE GARNOT, 2007, no.62, p.226. Val de Grâce に「ラザレ」, SAUVAL, I, p.419; LAZARE, p.740-741; MIGNOT(C), 《L'Eglise du Val-de-Grâce au Faubourg Saint-Jacques de Paris: Architecture et décor nouveaux documents 1645-1667》, BSHAF, 1976 Année

1975,p.101-136. MIGNOT(C),in PEROUSE DE MONTCLOS,1994,p.545-552.

20 二〇〇一 栗田。

21 フロンドの乱。CARRIER(H),in BLUCHE,p.624-626.

22 連作「聖ゲルウアシスと聖プロタシウス伝」(ルーヴル美術館、等で所蔵)に関する作品。DORIVAL,1976,Ino.111-118. p.65-69. 一九九四 栗田、一九四頁。なお、サン＝ジェルウエ聖堂のC5747 LAZARE. p.386-387; HILAIRET. II. p.420; BRUNEL(G), in PEROUSE DE MONTCLOS,p.450-453.

本研究は、平成二十一年度における、科学研究費・基盤研究(C)、「17世紀フランスにおけるイエズス会の挿絵本と絵画の関係についての総合的研究」、同基盤研究(C)「近代英国を中心としたエンブレムにおける聖と俗の表象に関する学際的研究」、並びに、芸術学部共同研究費「アート・アーカイブ構築に向けての基礎研究」、同一般研究「日欧の17世紀における、挿絵と絵画との関係についてのデジタル・アーカイブ基礎研究」にもとづく研究である。



図2 P・ド・シャンパーニュ《キリストとカナの女》  
 1628年頃 画布・油彩 250×159 cm  
 パリ、ヴァル＝ド＝グラス聖堂、サンテ・エ・デ・ザルメ美術館  
 Inv.DAPA-OM899  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.166-167; 1976 DORIVAL, II, no.54, p.35-36; 2007 LAVALLE, 7, p.95, reprod. en c.

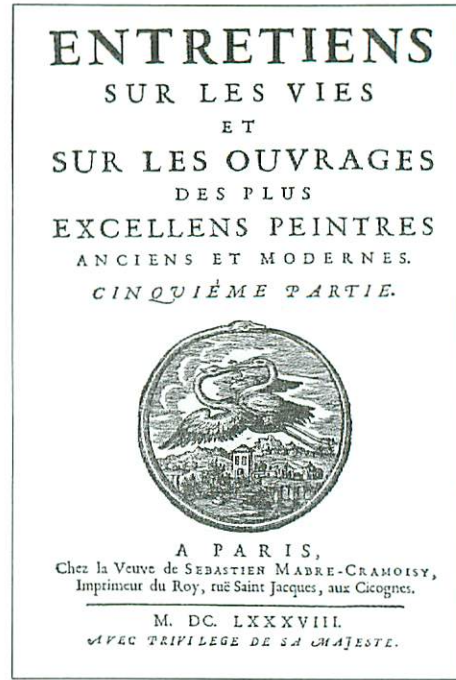


図1 A・フェリビアン著  
 『古今の最も著名な画家の生涯と作品についての対話』  
 FELIBIEN, *ENTRETIENS*  
 1668年刊行 第V巻、タイトル・ページ



図4 P・ド・シャンパーニュ《羊飼いたちの礼拝》  
 1629年頃 画布・油彩 390×246 cm 所在地不明  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.167; 1976 DORIVAL, II, no.38, p.26-27.



図3 P・ド・シャンパーニュ《キリストのエルサレム入城》  
 1628年頃 画布・油彩 250×193 cm  
 パリ、ヴァル＝ド＝グラス聖堂、サンテ・エ・デ・ザルメ美術館  
 Inv.DAPA-OM900  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.166-167; 2007 LAVALLE, 8, p.95, reprod. en c.



図6 P・ド・シャンパーニュ 《神殿奉獻》  
 1630年頃 画布・油彩 398×327 cm  
 デイジョン美術館 Inv.CA104  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.166-167; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.240; 2007 SAINTE FARE GARNOT, no.4, p.87-88, reprodu. en c.

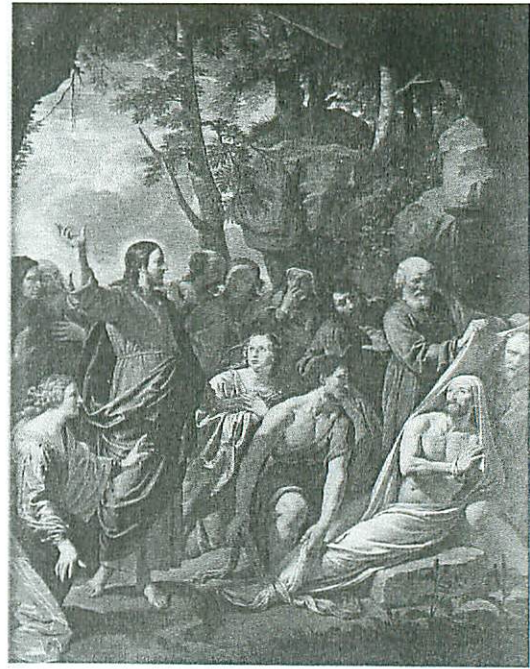


図5 P・ド・シャンパーニュ 《ラザロの復活》  
 1630年頃 画布・油彩 383×302 cm  
 グルノーブル美術館, inv.MG57  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.167; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.240; 1976 DORIVAL, II, no.45, p.30-31; 2007 SAINTE FARE GARNOT, no.6, p.92, reprodu. en c.



図8 P・ド・シャンパーニュ 《ルイ十三世の誓い》  
 1638年頃 画布・油彩 342×267.5 cm  
 カン美術館 Inv.163  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.168; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.240; 1976 DORIVAL, II, no.p.104-105; 1994 栗田, p.294; 2000 DESECHEVAL(A.P.), *Le dieu caché*, no.32, p.158 ; 2007 SAINTE FARE GARNOT, no.15, p.108, reprodu. en c.



図7 P・ド・シャンパーニュ 《世界を創造する神》  
 1635年頃 画布・油彩 175×220 cm  
 レンヌ美術館 Inv.803-9  
 文献：1688 FELIBIEN, V, p.168; 1976 DORIVAL, II, no.4, p.8-9 ; 2007 SAINTE FARE GARNOT, no.12, p.108, reprodu. en c.



図10 P・ド・シャンパーニュ 《聖女マグダラのマリア》  
1648年 画布・油彩 103.5×78.3cm  
ヒューストン美術館  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.175; 1976 DORIVAL, II, no.130, p.73; 1994 栗田, p.29; 1995 07-108.

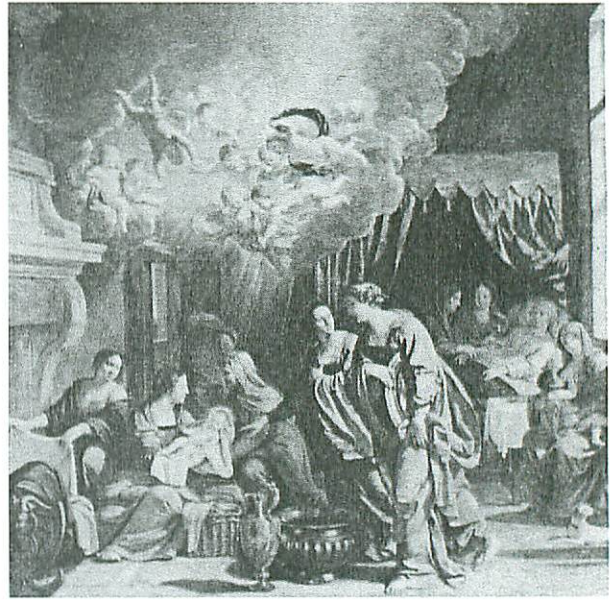


図9 P・ド・シャンパーニュ 《聖母の誕生》  
1636年頃 画布・油彩 435×430 cm アラス美術館  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.168-169; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.241; 1948 LEJEUX ; 1976 DORIVAL, II, no.15, p.15-16; 1994 栗田, p.293.



図12 P・ド・シャンパーニュ 《最後の晩餐》  
1648年頃 画布・油彩 85×149 cm  
ルーヴル美術館, Inv.1125  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.175; 1854 GUILLET DE SAINT-GEORGES, p.242; 1976 DORIVAL, II, no.59, p.38-40; 1994 栗田, p.292; 1995 LESNE, no.25, p.120-124; 2007 SAINTE FARE GARNOT, no.43, p.180-183, reproducen c.

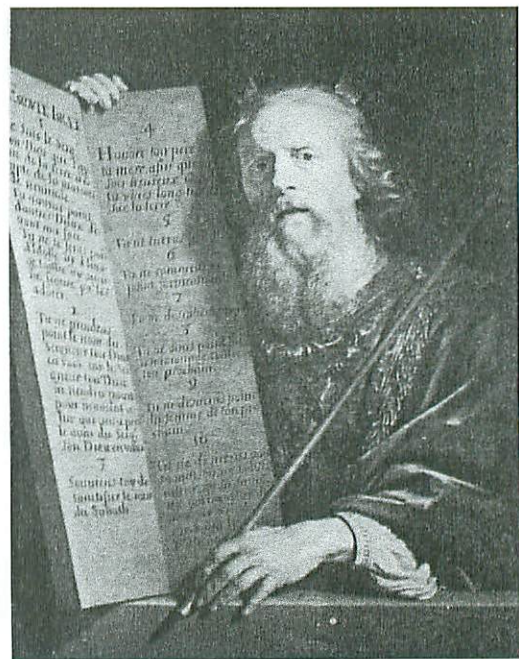


図11 P・ド・シャンパーニュ 《立法の石版を示すモーセ》  
1648年頃 画布・油彩 93×74.1 cm  
ミルウォーキー・アート・センター  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.175; 1976 DORIVAL, II, no.12, p.13; 1994 栗田, p.292



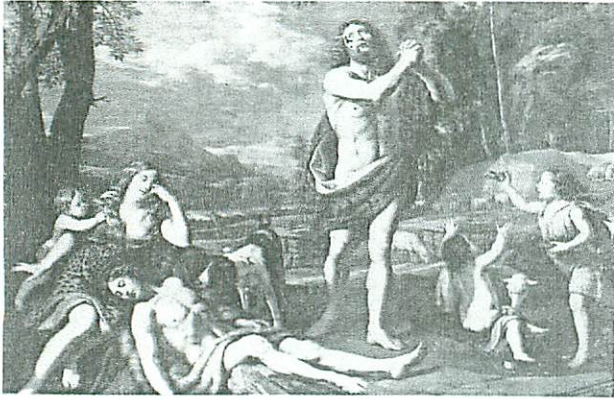


図14 P・ド・シャンパーニュ  
《アベルの死を悲しむアダムとエヴァ》  
1656年 画布・油彩 312×394 cm  
ウィーン美術史美術館 署名と年記  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.176; 1854 GUILLET DE  
SAINT-GEORGES, p.242; 1976 DORIVAL, II, no.8,  
p.11-12; 1994 栗田, p.292.

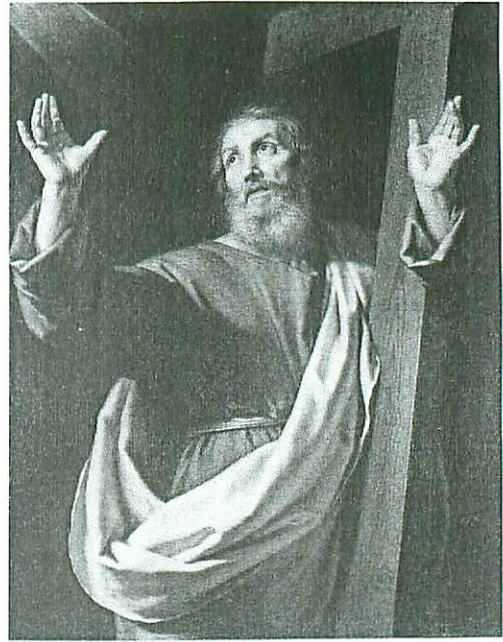


図13 P・ド・シャンパーニュ 《使徒聖ピリポ》  
1649年以前 画布・油彩 117×89 cm  
ルーヴル美術館 Inv.1132  
文献：1688 FELIBIEN, V, p.175; 1854 GUILLET DE  
SAINT-GEORGES, p.244; 1976 DORIVAL, II, no.133,  
p.74-75; 1994 栗田, p.293; 2007 HM, no.77, p.262, reprod.  
en c.